

発達評価ツールによる評価の仕方

Step1 大きく総合的に子どもの発達を理解する（現状把握）

- ①「チェック項目の説明」目を通す。各項目の評価のしかたは事前に理解しておく
- ②子どもの当該月齢から月齢の上に向かってチェックしていく。
- ③当該月齢より月齢上に向かって○を付けていく。✓が3つ続いたら終わり。
✓から月齢下に向けてチェックし、✓が3つ続いたら終わり。

※注意：①パス（通過した）＝○ パスしていない（通過していない）＝✓
できないことはマイナスではないので×はつけない。
子どもの発達には様々な育ちが相互に関連しているので、一つの領域、例えば「運動発達」だけ評価するといったことは避け、全領域をチェックする。

Step2 現状把握から子どもの強みや課題・目標を把握する（新たな気づき）

- ①領域ごとに、子どもの日常の様子と評価結果を考える。
- ②評価前にとらえていた子どもの発達像と評価結果はだいたい一致しているか、齟齬があるかを見る。評価結果は専門職自身がなんとなく感じていたことの根拠となる場合と、子どもの発達の新たな気づきとなる場合もある。
- ③「運動発達」、「社会発達」、「言語発達」4領域、「横の関連」を見る。
たとえば、「言葉の発達が気になる」と感じた場合、他の領域の発達を同時に見ることで、子どもの発達の全体像が見えるとともに、新たな発見がある可能性が大きい。

Step3 新たな気づきや強み、課題や目標を整理し、支援に反映させていく

- ①子どもの発達の今の状況を把握することで、強みとなる得意なことと、苦手なことが明らかになる。苦手を克服させるのではなく、強みを活かせることを大切に保育教育目標を立てることが可能になる。
- ②子どもにとって、ふさわしい活動内容や環境を整える上で参考になる。

Step4 保育教育実践中に問題が起こった際に「保育教育実践ガイド」として活用する

- ①子どもに支援が必要となった時、施設内の専門職間で情報共有し、ケース会議などで活用する。
- ②外部の専門機関との連携時に、多職種専門職との連携を円滑にする。

Step5 STEP3で得られた評価を基に計画実施された結果を再評価し、保育教育の質向上を確認する

- ①定期的に評価を繰り返すことで、子どもの成長・発達を把握することができる。
- ②発達評価により、一人一人の保育教育専門職の子ども理解の力をつけ、保育教育の質の向上が期待できる。

育児環境評価ツールによる評価の仕方

Step1

評価を実施する時と場所、方法を選ぶ

- ①入園時及び、年度初めなど定期的に質問紙（チェックシート）を用いて、保護者が直接記入する。
 - ・ 保育パワーアップ研究会のホームページに掲載されている全国平均のポイントと比較する。
- ②保護者との個別懇談時などに、保育教育専門職が聞き取りを行う。
- ③保護者との日常の何気ない会話の中から、気なる項目を選択し聞き取りを行う。

※注意：保護者と保育教育専門職の信頼関係が保たれることが必要

Step2

新たな気づきや特徴、課題や目標を整理し、子どもや保護者を取り巻く環境を多角的に把握し支援につなげる

- ・ Step1①により、自園の育児環境の特徴を捉え、園にあわせた目標を立て、園としての具体的な取り組み（保育教育指針など）をまとめた年間計画を作成し、効果的に活用する。
- ・ Step1②③により、機会の頻度だけでは読み取れないより深いかかわりの背景を把握する。
- ・ 得られた深い情報を支援計画や実践に活用する。
- ・ 園内活動からは見えない子どもや保護者を取り巻く育児環境を多角的に把握し的確な支援につなげる。

子どもの困り感に寄り添う支援ツールによる評価の仕方

Step1

あてはまる姿をチェックする

それぞれの支援領域と項目から、「子どもの姿」「専門職から見た具体的な視点」に沿ってチェックする。

- あてはまる姿がある場合は、「該当に○印」欄に印を記入する。
- あてはまる姿が無い場合は、「その他」の「該当に○印」欄に印を記入し、「自由記述」に具体的な姿を記入する。

Step2

背景要因を考える

チェックした項目の「背景要因」の可能性が高いと考えられるものすべてに、先に述べた3つの背景要因の例やポイントを参考に○印を記入する。

Step3

包括的に判断する

「○の印」だけにとらわれることなく8つの領域ごとに包括的な判断を行うことが重要である。

子どもの困り感に寄り添う支援ツール

領域	項目	子どもの姿	あてはまる姿がある場合は○を記入する。
1 音に対する反応 (聴覚)	①音や声に対して反応しない	聞こえていないので振り向かない 大きな音に対して、音のする方を向いたり、体をビクッとさせたり驚いたりするなどの反応を見せない 確実に音刺激だけで振り向くなどの反応がない	
	②音や声に対して関心がない	起きている時に、誰かが話しかけても反応が見られなかったり、周りの音に関心を示さない 聞こえているが、対人不安・対人緊張が強く、振り向きたくない 聞こえているが、自分がしていることに夢中になって気が付かない	○
	③音や声に対して耳をふさぐ	周りの音や声に神経質に反応し、不安定になる	
	④その他	(自由記述) 特定の音におびえる	○
	⑤人や物に触ることには抵抗がある	触ることによって過敏である・鈍感である	○
	⑥その他	(自由記述)	○
乳児期		大きな物体を目で追視しない	
		目の前の物に手を伸ばしてつかもうとしない	

あてはまる姿が無い場合は「その他」に○を記入し、(自由記述)欄に内容を記入する。

背景要因になっている可能性が高いと思われるものに○を記入する。複数ある場合はそれぞれに○を記入する。

社会的スキル評価ツールの評価の仕方

Step1

子どもの社会的スキルの状況を把握する（現状把握）

- ①質問紙の項目について、日ごろの子どもの様子を良く知る専門職がチェックする
- ②各項目について、「いつも」「時々」「ない」の3段階で、最もあてはまるところに○をつける
- ③いつも=2点、時々=1点、ない=0点として、領域別に合算し、自己表現、自己制御、協調、それぞれの状況を把握する

Step2

現状把握から、子どもの強みと課題、支援の必要性を考える（支援方法策定）

- ①領域ごとに、子どもの日常的な姿と評価結果を考える
- ②子どもの強みと課題から、支援の必要性を考える
- ③子どもの強みに目を向けながら、領域ごとのバランスや、社会的スキル以外の発達の状況、環境など現状に関連する要因を考え、目標や支援計画を考える
- ④①-③について、個人だけでなく、クラスや園単位で把握する

Step3

継続的な評価と振り返りを行う（支援方法策定後の評価）

定期的な評価や支援後の継続的な評価により、子どもの成長や支援の効果を検討し、次の支援につなげる